

海南島讀本

南支調査會編

本年二月、皇軍海南島に敵前上陸を敢行して以來、之に關する書物相踵いで公にされ、僅々半歳にして既に數種を數ふるに至つたが、南支調査會に依つて更に一書を加へた。即ち海南島讀本である。

抑々海南島は東、香港を望み、西、一衣帶水の海を隔て、佛領印度支那と相對し、シンガポール、フィリッピン亦指呼の間にある。隨つて海南島は之等白人の根據地を睥睨し得べく、今、海南島、皇軍の手中に歸したる上は繁榮を極めし香港も既に衰亡に歸したるに等しく、シンガポール要塞も亦然りである。佛領印度支那に於ける亦同様である。されば東洋より白人勢力を驅逐し、我が太平洋制海權を確立するの一大據點は海南島に非ずして何ぞ。嘗て參謀總長川上操六大將をして「海南島は東洋の咽喉なり」と言はしめしも宜なる哉である。

この故に海南島を知り、以て東洋永遠の平和を策するは我が國民の急務であり、之に關する書物の多きを加へたことは吾々國民として慶ばしき限りである。

本書は二百餘頁を出でざる小冊子に過ぎないが、その載すとところは沿革・地質・地形・住民・産業・交通等地理的諸事象を網羅し、個々に就て簡單且つ明瞭、教科書的に記されてゐる。而してその記述は一貫したる思想的背景を有し、一定の意圖の下にな

されてゐる。例へば氣象の章に於て、海南島は高温多濕、惡疫流行して白人の居住には堪へない。堪へ得るは日本人のみであり、日本人こそこの島の開發者として唯一の有資格者であると、的確なる資料に基いて論じ、開發に對する邦人の使命を暗示してゐるが如きそれである。又産業の記載は全體の過半を占め重要農業・牧畜水産工業・林業等に分ち各々章を設けて特に詳述して居り、その説明は經濟上に於ける海南島の將來性を明かにし、以て殖民の可能性を強調してゐる。この點、本書が單に地理書たるに止らず、更に我が南方經營に對する植民讀本たるの諸要素が多分に含まれてゐると言ふことが出来る。

なほ更に「帝國聲明と支那人の觀察」、「第三國の權益と輿論」の二章を設けて海南島をめぐる國際情勢を明かにし、最後に「東亞安定の基地」なる章を設けて海南島の東亞安定に對する價值を述べ、海南島占領の如何に意義深きかを論じてゐる。卷末には附録として海南島旅行案内を載せ、旅行上に於ける萬般の注意を與へ、實地踏査に資してゐる。これ又通俗書としての本書の價值を高からしむるものであらう。

以上述ぶるところの如く本書は他の同種の書か地誌的に取扱つてゐるに反しこれを軍事的政治的觀點に於て論じてゐる。これ本書の特筆すべき點で、長所と看做すべきは言を俟たない。兎に角海南島一般を知るには手頃な參考書であり、且つ軍事的意義を明かにするものでこの點に於て地理に志すもののみならず一般國民の通俗書としてお薦めしたい。(菊判二〇三頁、地圖一葉、寫真

一葉、南支調査會發行、定價壹圓）（柴田孝夫）

## ブラジル、サンパウロ州内の考古學的調査

「ブラジルに生れた此報告を本邦學界に紹介する機會を與へられた光榮を感謝致します。ささやか乍ら對黠國にある同胞二十萬の事業の一として先輩各位の御指導願います。このはしがきを讀む者は遙か南米の地で我が祖國の事を思ひ浮べ乍ら雄々しくも開拓事業に従事するかたはら文化事業にも乗り出したブラジル、サンパウロ在留の我が邦人等に幸あれかしと祈り度くなる。

本書は一九三六年三月にサンパウロ帝國總領事官邸で生れた在留邦人の組織する「ブラジル・インディオ文化研究同好會」の第一回報告書である。今それが當時の總領事であり又會長であつた市毛孝三氏等の盡力によつて東京人類學會の人類學叢刊乙先史學第二冊として公刊された事は同會員は固よりのこと内地の我々に取つても等しく慶びとする處である。本書の記載乃至考察に就いてこれを専門的な見地からなほ多少の議すべき點であるとしても、ペルーのインカの文明の二、三しか知られてゐない我が考古學界に取つてこの南米の先史文化の具體的な姿は一のフレッシユなものとして學的興味を與へるも充分なものがある。

本書に收められた遺跡はこのサン・パウロ (Sao Paulo) 州内の海岸地帯 Igape 郡にあるシボプラ (Gyopura) 貝塚、海岸山脈内のアレクソン (Alecir) 貝塚、及び奥地 マットグ・ロソ州 (Mato Grosso State) 境にあるアリアンサ (Aliança) の三者で、その一

々の遺跡の發掘狀況と遺物とが録されてある。而して其の一期の發掘はたゞく渡米された鳥居龍藏博士の指導の下になされたのであつた。

さてシボプラ貝塚はリベイラ河 (Rio Ribeira) に沿ふたイグアッペ港から約五時間の海外興業株式會社の植民地内にある。こゝにて四つもの貝塚が發掘された。何れも標高約四十米位の丘陵麓に位置し今なほ附近の低地は沼地をなしてゐる。牡蠣がこの貝塚を形成する貝類の九十八%を占むる事から、この原地形が想像される。不思議にも土器は一片も存在しない。鳥獸鳥骨の他に最下層から大形磨石斧數個を得た事實は特筆さるべく、また他に貝層中から十一體の横臥屈葬の骨が見出された。アレクリの貝塚もあまり海岸から遠くないベイシエ河 (Rio do peixe) の支流ブラッソ・ド・メイオ (Rio do Meio) に沿ふた平地にある。貝は陸産のカタツムリである。こゝでも貝墓と疑はれる人骨の埋葬を見た。成人骨五體、幼児骨をその傍らに伴つて發見した。そのあるものには頸部に頸飾用の有孔獸牙を七十五個も伴ひ、また赭土を頭骨に見た。石器中粗雑な打石器は技巧の拙なものである。最後のアリアンサはサンパウロ市の北西八百キロメートルにある臺地で、開拓前は鬱蒼たる大森林に蔽はれてゐたと云ふ。この遺跡は後述の土器を伴出する磨製石器類を見る地帯と殆んど土器を伴はない所謂小形石器を發見する地帯とに區分されて、後者は報告者は「舊石器時代の石器とも見るべき……」と言つてゐるが、それは所謂後期舊石器の剝片技術を保持した石器類と解すべきであらう。